既成文壇の刷新と若い文学者の輩出を求めた
文芸投稿雑誌『青年文（せいねんぶん）』、全号復刻！

青年文 復刻版

◉一八九五年二月～一八九七年一月
全四巻＋別冊一

揃定価＝本体六〇、〇〇〇円＋税
編集＝田岡嶺雲＋山県五十雄
発行＝少年園
解説＝西田勝

のちに反骨の文芸評論家として知られることになる
田岡嶺雲（一八七〇～一九一二）が、一八九五（明治28）年に
友人の山県五十雄とともに責任編集をした文芸投稿雑誌。
発行所は、五十雄の兄で『少年園』『文庫』の刊行を
成功させてきた山県悌三郎が経営する少年園。
大学を卒業したばかりの田岡嶺雲が、
佐々醒雪・笹川臨風らと果敢な文芸批評を展開し、
投書欄では若き日の徳田秋声も激しい社会批判を展開している。
投稿雑誌の枠を越えた文芸批評誌として
近代文学・近代史研究に必須の文献である。

第壹卷第四號
明治二十八年十月五日發兌
青年文
時文
大不平なれ　青年文記者
今日の俗俳　青年文學者の自殺
民友子の『鐵曲論流行』
浜六の『海賊』
蹤水の紀行文
新日本の文學
『鶴鶴旅館の快讀』
『桐一葉』
猿猴文學者
其二
馬琴を知何にせる
『早月塚』
『文藝倶樂部第四編』
『河千代』
『從行巡査』
東亞學院
日本書の缺點
青年繪畫會發見
『少年園』の厄難
今代の文章を論ず　蝸廬
歌俳句
浦なれ衣　遍名氏
秘めごと　鶴蕭子
止まるべきか　松月生
行くべきか
清き小川　葉末露子
我思ふ人　幽芳
さゝ波　畑村子
嬰兒　候月
苔むす墓碑　栗山子
渦巻く烟　蝴蝶
貧女　淡翠
寄櫛　九星漁史
我が思ふ、　木全眠花
二日の月　長田開北
蘆東山　蠡湖生
幽囚　作者不知
花見衣　か、る
この寫眞　好俗生
戀愛私觀　初田逸雪
雪月　松井清二
花　飯田芳城
老鶯　朝熊男
机上梅　自月生
出軍　同月生

不二出版

推薦のことば

『青年文』復刻を喜ぶ

槙林滉二
尾道大学芸術文化学部教授

『青年文』が復刻されるという。もう何年前になろうか、東京大学の明治新聞雑誌文庫で、息を呑む思いで、一冊一冊捲ったことを思い起こす。何より「時文」欄に多くの啓発を得た。樋口一葉や泉鏡花の文学の計測、鏡花の人気一時衰えたを再評する論や、悲惨、深刻小説の評定、その中、川上眉山の「うらおもて」を「大拙作」なりと評していて驚いたことなどを思い起こす。明治二十九年、徳富蘇峰を「説を変ずるはよし、節を変ずる莫れと。」と論じていたことなども、以降の蘇峰動向の一つの予兆として心に残っていた。

『青年文』は、明治二十八年より二年間、刊行された投書雑誌である。田岡嶺雲、山県五十雄、佐々醒雪、笹川臨風らがこの誌に拠り、明治中期文壇の整序と次期文学や思想の方向を開示した働きは鮮烈で、とりわけ、一葉や鏡花ら明治中期の良質の浪漫や広津柳浪、川上眉山、小杉天外ら悲惨・観念小説への秀れた錘鉛、若き日の徳田秋声らを介しての自然主義潮流への予兆提示など、その果たした役割は大きい。今一つ、投書雑誌として、日清戦争を中心とする日本近代思潮の大きな変動期の実情を観測させる重要な視座を与えてもくれる。この時代、何を志し、何を失ったか。

改めて、その全像が手に取って親しく開扉できることを知り、私は、ただただ踏舞垂涎の気持ちの中にいる。

文学的転換への切迫した意識

平出　隆
詩人・多摩美術大学美術学部教授

主筆田岡嶺雲らによる「時文」を巻頭に掲げて、日清戦争後の文学の「沈滞腐敗」を打ち破ろうと『青年文』は刊行された。その時期は、わずかに明治二十八年二月から明治三十年一月までと短かったが、当時の鋭敏な青年たちのもった文学的転換への切迫した意識がどのようなものだったか、「時文」が起したじつに多面多岐にわたる批評的衝突によって、明らかになる。

私がいま手許に置いて眺めている『青年文』は、『文庫』の詩人であった伊良子清白によって所蔵されていた合本である。清白は詩壇を流離して四半世紀後の昭和四年、新潮社版『現代詩人全集』へ自身の詩の再録を求められたとき、雑誌資料をほとんどもたなかった。これを助けた一人が『文庫』の仲間内田茜江(素一)で、内田から『文庫』とともに『青年文』を贈られた清白は、往時の純粋に模索的だった日々を深く呼び覚まされた。

『文庫』の兄弟雑誌『青年文』の意義はこのように、文芸批評誌としてのそれにとどまらない。清白に限らず、河井酔茗、塚原伏竜(後の島木赤彦)なども、子規や虚子の句と同席しながら、嶺雲らの激しい批評意識の傍らに《詩》の意識化をめぐるあてのない模索をはじめていた。『しがらみ草紙』『早稲田文学』『帝国文学』『国学院雑誌』『国民之友』『六合雑誌』『文学界』『太陽』、これら既成の雑誌に否をいう意味はいかなるものだったか、検証されるべき事柄は想像以上に大きい。

関連図書

石井研堂＝主宰〔明治22年～28年刊〕

小国民　全16巻・別冊1

本誌は、児童文学・児童文化の草創期に創刊された少年・少女向け児童総合雑誌の嚆矢である。のちに創刊された博文館の『幼年雑誌』と人気を二分したが、あくまで優位を保ち、多くの読者をとりこにした。執筆はほとんど石井研堂ひとりが行なったが、ほかにも幸田露伴・小山内薫・金田一京助・鈴木三重吉などが寄稿した。本復刻では、創刊から誌名が「少国民」に改まる一八九五年までを対象とし、児童文学史及び近代教育史・文学史研究に呈するものである。

- 復刻版編集＝上笙一郎・上田信道
- 別冊＝解説(上笙一郎)・解題(上田信道)・総目次・索引／付＝『小国民』綜覧(石井研堂編)』(一九四一年)
- B6判・A5判・上製・総7、980頁
- 本体揃価格288、000円＋税
- '99年10月配本完結(復刻版)
- ◉推薦＝勝尾金弥・本田和子・山口昌男・山住正己

田岡嶺雲＝著／西田　勝＝解説〔1910年刊〕
西田　勝・平和研究室＝発行【取扱図書】

病中放浪

一九〇六年七月から一九〇九年一一月までに書かれたエッセイを集めた、嶺雲最後の著作集。手記や書簡の形式で文明評論を展開。序＝大町桂月ほか、跋＝斎藤弔花、装丁＝小杉未醒、挿画＝小川芋銭。

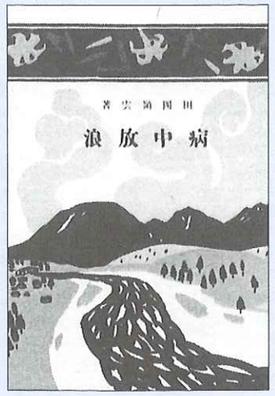
- 四六判・並製・函入・250頁・本体価格3、500円＋税
- '00年6月刊(復刻版)

田岡嶺雲・小川芋銭＝著／西田　勝＝解説〔1908年刊〕
西田　勝・平和研究室＝発行【取扱図書】

有聲無聲

老荘の世界に遊んだ芋銭の一七枚の漫画と白賛、それらに嶺雲の一九〇七年夏から歳末までに書かれた、鋭い文明批評を潜めたエッセイを加えた画文集。

- 四六判・並製・函入・158頁・本体価格2、000円＋税
- '00年6月刊(復刻版)



陽其二・堀越修一郎ほか＝編〔明治10年～31年刊〕

穎才新誌　全20巻・別冊1

本誌は、自由民権運動のただ中に創刊された全国的規模の投稿雑誌の先駆である。明治初期・中期の青少年たちの文章・絵画・詩歌・書の晴舞台であった本誌は、「明治文学の幼稚園」と呼ばれるほど、のちに多くの作家・政治家・学者を輩出した。一八七〇～九〇年代日本の、地方も含めた文化・社会状況を生々しく体現する第一級資料として近代思想史・教育史・文学史研究に提供するものである。

- 別冊＝解説(上笙一郎)・総目次・索引
- B5判・上製・総9、732頁
- 本体揃価格460、000円＋税
- '93年12月配本完結(復刻版)
- ◉推薦＝大久保利謙・上笙一郎・唐澤富太郎・佐藤秀夫・久木幸男・堀越克明・本田和子

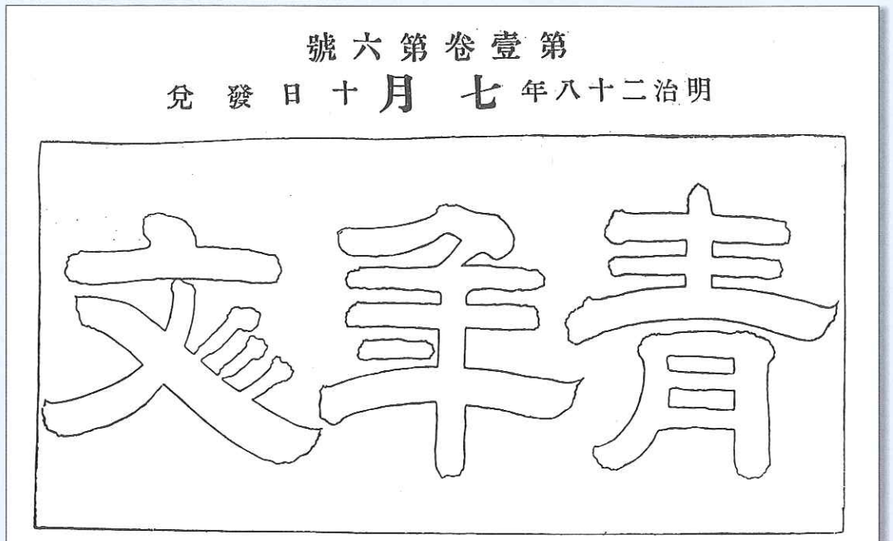
女子文壇社＝刊〔明治38年～大正2年刊〕

女子文壇　全54巻・別冊1

日本最初の女性文学雑誌・フェミニスト雑誌『青鞜』に先立つこと六年、二〇世紀初頭に二〇年にわたって若い女性たちの自己表現への渇望を存分に汲み上げた投稿雑誌。文壇への登竜門であるばかりでなく、のちに広く社会に影響を与えた女性たちを輩出した。大正デモクラシー前夜に開花した一〇代の女性たちの熱い思いがあふれる本誌は、女性文化の原点ともいうべき可能性を秘めた資料であり、近代教育史・女性史・女性文化研究に大きく寄与するものである。

- 別冊＝解説(渡邊澄子)・総目次・索引
- 菊判・上製・総約25、000頁
- 本体揃価格990、000円＋税
- '02年6月～'05年8月配本(復刻版)
- ◉推薦＝阿木津英・飯田祐子・上笙一郎・竹盛天雄・米田佐代子

内容見本



第壹卷第六號

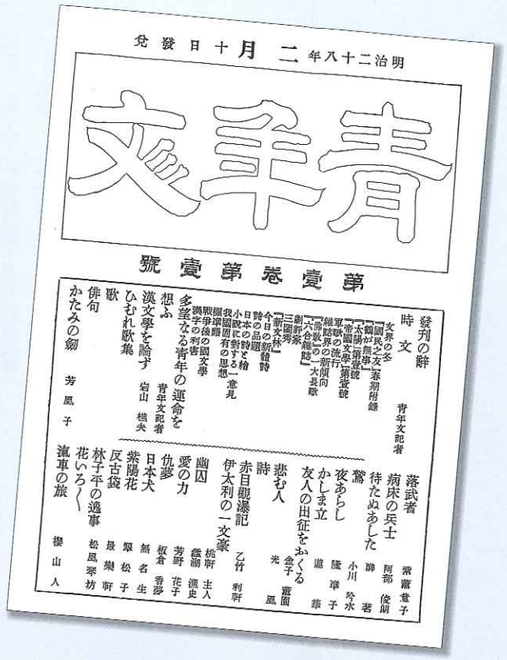
明治二十八年七月十日發兌

青年文

時文

紅葉の『不言不語』　青年文記者
『太陽』第六號
泉鏡花
『新製蒙物語』
史學界の新流行
雑誌挿圖の悪流行
『文學界』の變調
俳句は主觀詩か
寫眞術の一進歩
輕浮と沈着
『早稲田文學』記者に與ふ
『太陽』第六號の小説
『外科室』
悪癖
『經つくゑ』
『文藝倶樂部第六編』
『早稲田文學』の雑誌專門論
理學者と美術家の自然觀察
論文家
内村鑑三氏
新國字論
『アカチャの花』
『ありのすさび』
『新聞賣』
『藤衣』と『たのし記』と
文界の一異現象
愚なる一記者
文界の幇間
大史筆を要す
文界の一段落
近刊雑書

歌
俳句
汀の櫻　大西自月
玉織姫　醉若
寄乞丐　葉末露子
心の姿　紫薫童子
一塊の土　小川吟水
鐘樓守　伊良子暉造
うき琴　烟村子
泉と花　露華
さゝがに　葛衣
花の宿　幽芳生
山寺　槿花庵
聞擣衣有感　兒玉輝子
ひなの夕暮　伏龍
春の野　常盤舍
秋の夜　隆準子
捕風捉影　柳塘居士
廣陵斷錦　國分犀東
詩
幽囚　蠡湖生
花一枝　大俗
一樹の蔭　柳城生
秋の蝶　水月
ともし火　芳城
自然の美　田中英二



明治二十八年二月十日發兌

青年文

第壹卷第壹號

發刊の辭　青年文記者
時文
文界の冬　國民之友
『太陽』第五號　帝國文學
『太陽』第六號　雅歌
『帝國文學』の新流行　雅歌
『帝國文學』の後年　雅歌
『帝國文學』の新流行　雅歌
『帝國文學』の新流行　雅歌
『六合雜誌』の大失敗　雅歌
『新文林』　三島霜川
『新文林』　宮崎湖處子
時の人物　樹下生
今日の題目　樹下生
日本の特色　樹下生
我國に創すべき思想　童見
國語の國文學　飛塵
國語の國文學　飛塵
漢字の利害　飛塵
多望なる青年の運命を想ふ　青年文記者
漢文學を論ず　宮山　槙夫
ひむれ歌集　宮山　槙夫
俳句　芳風子
かたみの劍　芳風子
落武者　常蹟童子
病床の兵士　阿部　俊明
待たぬあした　時雨　若
驚　小川　吟水
夜あらし　隆　準子
かしま立　遠　菲
友人の出征をふくる　金子　薫園
悲む人　光　風
詩
赤目觀瀑記　乙行　利昇
伊太利の一文家　桃斯　主人
幽囚　蠡湖　漁史
愛の力　芳野　花子
仇夢　板倉　香夢
日本大　紫陽花　新名　生
反古袋　翠　松子
林子平の遺事　最　樹軒
花いろ〜　松風琴坊
流車の旅　摸山人

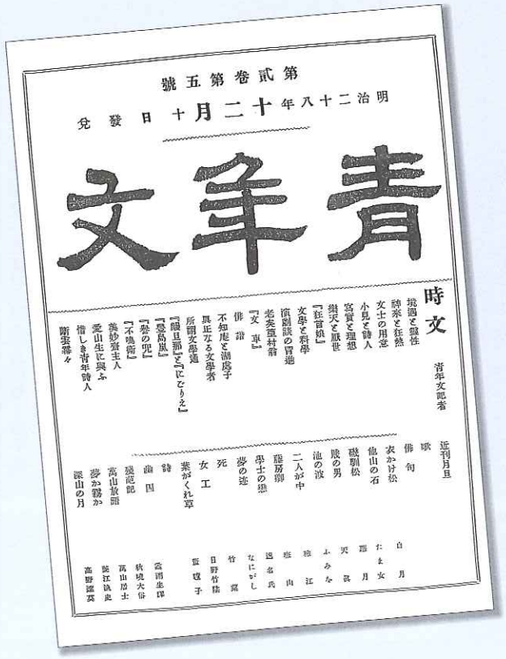
若しそれ文學雑誌の數のみを以て文運の消長を卜し得べくんば、我明治時代は日本文學史に於て前古に比なき最も隆盛なる最も光輝ある一時代と誇ることを得べし。請ふ試に眼を現時の文壇に注ぎ見よ。城北翠滴る千駄木の丘上には、『まがらみ草紙』の旗幟正明なるあり。城西蒼田万頃の早稲田の隴間には、『早稲田文學』の金鼓堂々たるあり。近くは小西湖上倒に影を醮して、巍然空に聳ふる高閣よりは、『帝國文學』の出づるあり。落花を浮べて潺湲岸を洗ふ江戸川に近く、嚴然鎮坐する巨堂よりは、『國學院雑誌』の出づるあり。此他『國民之友』といひ、『六合雜誌』といひ、『文學界』といひ、『太陽』といひ、皆多少文學に關せざるはなく、更に又種々雑多の第二流文學雑誌を數へ來れば、

Thick as autumnal leaves, that strew the brooks
In Vallombrosa.

の概あり。

然れども我輩は未だ容易に明治の文學世界に滿足する能はざるなり。獨り文學雑誌の數のみを以て、隆盛無比光輝燦爛の贊辭を與ふることを肯んぜざるなり。却て我輩は、現時の文壇は沈滯腐敗に傾き、單調無味に陷り、操觚の士徒に舊弊を株守し、進て革命を企つるものなき衰頽の兆を顯はせり、と言はざるを得ざるを悲むものなり。請ふ見よ、過ぐる二三年間の文壇を。彼の民友社の勃然として起り、硯友社の崭然として頭角を擡げ、火山の爆裂するが如く、洪水の漲る如き勢を以て、當時の文壇に一大活氣を與へ、舊弊腐敗を掃蕩し盡くしたる時に比べて、今日は如何に寂寞荒涼、秋天の如く、冬日の如くなるぞ。二三年來一の蘇鞏も、一の紅葉も、はた一の露伴も出でず、沈滯腐敗せること古池の瀦水の如く、單調無味なること長日の遠洋航海の如し。

「文壇の寂寥斯の如し、蘇鞏、紅葉、露伴は蘇鞏、紅葉、露伴に於て既に盡きたるか。我國は、もはや新なる文才を生み出すの力なきや、山水の俊風光の美、天下に冠たる我大日本の文學生産力は斯くの如く乏しきか。何ぞ知らん天下の人才幾多の蘇鞏紅葉露伴を有するこを。國域小なりと雖も、大日本は四千萬の人口を有せり。四千萬人中豈此三奇才を凌駕する大才無からでやは。昔しはクレー歌ひにき。



第貳卷第五號

明治二十八年十二月十日發兌

青年文

時文

境遇と發性　青年文記者
詩歌と女性
女士の用意
小鳥と婦人
宮崎と無思
樹天と厭世
『紅葉論』
女學と科學
偶感試の實過
悲哀無村翁
『女　車』
俳　諧
不知庵と御殿子
其正なる文學者
所謂文學論
『曼島風』
『曼の兜』
『不塊俗』
善鈔宮主人
愛山生に與ふ
惜しき青年詩人
斷雲帶々

近刊月旦
歌　白月
俳句　たま女
袁かけ松　踏月
龜山の石　哭訊
磯馴松　ふみな
磯の男　稔江
池の波　稔山
二人が中　遠名氏
聽房卿　女にがし
學士の恩　竹窟
夢の迹　日野竹陰
死　藍雪子
女工　藍雪子
葉がくれ草
詩
曲　國　藍雪志保
猿蓑記　秋城大伯
高山放歌　萬山居士
夢か醒か　飯江孔美
深山の月　高野雲窟

時文

紅葉の『不言不語』

今年の初刷より『讀賣』の紙上に掲げ初めて、世上の喝采を博せし『不言不語』は、例の美裝の一部となりて春陽堂より出でぬ。吾人は讀去り讀來るの間に於て、評判ほどの面白味を見出す能はざりき。いはゞ涙香が探偵小説の文に飽を附けたるまで、笠原の奥樣が其美しき顔上の春の夜の月の如き一點の曇をたどりて讀む者を迷樓の闇に入らしめ、折節は微かに喜微の光を洩さぬにはあらねど、其微光は、讀者の眼を迷はしてまた〳〵闇黑を感ぜしむるの媒となるのみにして、蓋し迷ひの迷ひに誘ひ入れて篇を終るを惜しましむるは、さすがは紅葉の筆なり。されども、此小説が讀者の好奇心を悲くはこれ有り、美感を動かすは即ち未だし。之を一篇の小説として、此一縷の秘密の外、何の結構かある、何の趣向かある、環も民之助も、遠山霞叟も、力夫も、此秘密には些も關係なきホンの列大名たるに過ぎず、且環と民之助の戀愛に落ちたる、民之助より霞叟を點し來り、霞叟より小兒の力夫を點し出せる、何れも此一篇と詩的關係なきものを突如と出せることとて、わざとらしき痕見えて面白からず。此等の諸人物はいづれも皆秘密の亂れの糸のさばき手にして、秘密その者に對しては毫も意味なきもののみなり。これを探偵小説としては、出で來り出で來る人物何れも皆秘密の糸の糾れに蔓まれて皆その闇黑の大覆面に被はるゝ涙香翻譯のものにすら企及すべきに非ず。唯末段、笠原夫人が、嘗て兄の子を毒害したる自らの罪悪を償ふて夫の不興を解かむが爲めに死を決して遠山家の小兒が疱瘡を看護し、遂に自らに其病を傳染して正に死せんとするの曉、釋すと唯その夫の一言に、茲に始めて三ヶ年の胸の曇りはれて、世にも嬉しげなる顔を彼方の胸に靠たせつゝ、環も喜べと打笑める其微笑と共に息絶ゆる所一場の好悲劇、眞の小説的價値あるは唯これのみ。『辱なき御涙や、泣かせたまふは我ゆゑにか、然れども、一言は釋すと聞かせたまへと希ひたまへば』の邊、悽惋の文字我も亦泣かむとす。但聯想の上より忌嫌ひし遠山の小兒が病の急をきいて、俄に其急に赴かむとする、餘り唐突にて心機變遷の微妙を叙するにやゝ其筆の足らぬを覺ゆ。又此秘密の根本たる『笠原家の鉅萬の富をば、旦那樣に襲せまほしき心の迷より、御家督なりし兄樣の

青年文

青年文
復刻版刊行概要
全四巻＋別冊一

復刻版巻数	原本巻号数	原本発行年月
第1巻	第一巻第一号～第六号	一八九五年二月～七月
第2巻	第二巻第一号～第六号	一八九五年八月～九六年一月
第3巻	第三巻第一号～第六号	一八九六年二月～七月
第4巻	第四巻第一号～第六号	一八九六年八月～九七年一月

◉推薦……槙林滉二（尾道大学芸術文化学部教授）
平出隆（詩人・多摩美術大学美術学部教授）

◉体裁……B5判・上製・総1、412ページ
全二四号を四巻に合本製本

◉別冊……解説（西田勝）・総目次・索引
（別冊のみ分売可＝本体価格1,000円＋税）
ISBN4-8350-4150-X

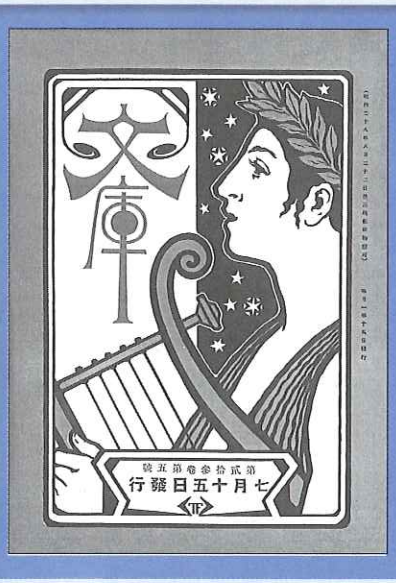
◉揃定価……本体六〇、〇〇〇円＋税
ISBN4-8350-4145-3

◉刊行……二〇〇三年十二月

田岡嶺雲
（1870-1912）

山県五十雄
（1869-1959）

近刊図書のご案内
小社では『青年文』の兄弟誌『文庫』の復刻も予定しております。



●表示価格はすべて税別。

不二出版
〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替00160-2-94084